P1-023

社会的に適応的な生活を送っている自閉症スペクトラム障害児・者のきょうだいの様相とその要因
―青年期におけるきょうだいに対するインタビューの検討から―

成田 泉[1]、水内 豊和[2]

[1]富山大学　大学院　人間発達科学研究科、
[2]富山大学　人間発達科学部

【目的】

自閉症スペクトラム障害児・者（以下、ASD児・者）のきょうだいについて、悩みやストレスの分析や、きょうだい支援プログラムの有効性についての研究は少なからずみられるものの、その対象になっているきょうだいは、そもそもに同胞からの直接的・間接的ストレスにあるものが選択されており、必ずしもASD児・者のきょうだいの母集団を反映しているとはいえないという研究上の課題がある。そこで本研究では、社会的に適応的な生活を送っているASD児・者のきょうだいに着目し、悩みに対するソーシャルサポートの活用状況及び活用したソーシャルサポートがどのような効果をもつのかについて検討し、適応にとってプラスに作用する要因を明らかにすることを目的とする。

【方法】

任意に設定した「社会的に適応的な生活を送っているASD児・者のきょうだい」の条件を満たす大学生3名にインタビューをおこなった。倫理的配慮として文書による同意をとった。分析にはM-GTAを用いた。

【結果と考察】

分析の結果、5つのカテゴリーグループ（以下、≪≫で示す）が抽出された。きょうだいは、≪同胞の障害に対するネガティブな気もち≫を抱くことがあり、それが≪先の見えない不安≫に影響を与えていると考えられる。そのような同胞へのマイナスな感情が≪周りの人々への願い・要望≫へとつながっていると考えられる。しかし一方で、同胞へのマイナスな感情がありながら、≪きょうだいを取り巻く周りの環境への満足・安心感≫を得ており、そのことが同胞へのネガティブな感情の減少につながっていると推察された。また、このような≪きょうだいを取り巻く周りの環境への満足・安心感≫が≪「一人の兄弟姉妹」としての同胞の認識≫へと影響を与えていると考えられた。

【総合考察】

本研究では、過去に同胞がかかわることで困惑した経験がありながらも、それに対する親からのサポートに現在満足しているきょうだいの姿が多くみられた。このように、きょうだいが家族や友人などの様々な人々をソーシャルサポートとして認識しその活用に満足することは、必ずしもきょうだいが「きょうだい支援」といった形のある直接的な支援を必要としているわけではないということを示唆するだろう。もちろんきょうだいの経験はそれぞれ異なるため（田倉, 2012）、きょうだいによってソーシャルサポートの形は様々であるということも忘れてはならない。

Presented by Medical*Online